

十円札

芥川龍之介

青空文庫

ある曇つた初夏しよかの朝、堀川保吉ほりかわやすきちは悄然しようぜんとプラットフォ
オムの石段を登つて行つた。と云つても格別大したことではない。
彼はただズボンのポケットの底に六十何銭しか金のないことを不
愉快に思つていたのである。

当時の堀川保吉はいつも金に困つていた。英吉利語イギリスを教える報ほ
酬うしゅうは僅かに月額六十円である。片手間かたてまに書いてある小説は

「中央公論ちゆうおうこうろん」に載つた時さえ、九十銭以上になつたことはな
い。もつとも一月ひとつき五円の間代まだいに一食五十銭の食料の払いはそれ
だけでも確かに間まに合つて行つた。のみならず彼の洒落しやれるより
もむしろ己惚うぬぼれるのを愛していたことは、——少くともその経済

的意味を重んじていたことは事実である。しかし本を読まなければならぬ。埃エジプト及の煙草たばこも吸わなければならぬ。音楽会の椅子いすにも坐らなければならぬ。友だちの顔も見なければならぬ。友だち以外の女にょにん人の顔も、——とにかく一週に一度ずつは必ず東京へ行ゆかなければならぬ。こう云う生活欲に駆かられていた彼は勿論原稿料のぜんしやく前借ぜんしやくをしたり、父母兄弟に世話を焼かせたりした。それでもまだ金のた足りない時には赤い色いろ硝子ガラスの軒燈けんとうを出した、人出入の少い土蔵造りの家うちへ大きい画集などを預けることにした。が、前借の見込みも絶え、父母兄弟とも喧嘩けんかをした今は、——いや、今はそれどころではない。この紀元節きげんせつに新調した十八円五十銭のシルク・ハットさえとうにもう彼の手を離れている。

……

保吉は人のこみ合つたプラットフォオムを歩きながら、光沢こうたくの美しいシルク・ハットをありありと目の前に髻髻ほうふつした。シルク・ハットは円筒えんとうの胴そとに土蔵の窓明りを仄ほのめかせている。そのまた胴は窓の外そとに咲いた泰山木たいざんぼくの花を映うつしている。……しかしふと指に触れたズボンの底の六十何銭かはたちまちその夢を打ち壊こわした。今日きょうはまだやつと十何日かである。二十八日の月給日に堀川教官殿と書いた西洋封筒せいようふうとうを受け取るにはかれこれ二週間も待たなければならぬ。が、彼の楽しみにしていた東京へ出かける日曜日はもうあしたに迫っている。彼はあしたは長谷や大友おほとと晩飯を共にするつもりだった。こちらにないスコットの油あぶ

画具らえのぐやカンヴァスも仕入しいれるつもりだった。フロイライン・メルレンドルフの演奏会へも顔を出すつもりだった。けれども六十何銭かの前には東京行ゆきそれ自身さえあきらめなければならぬ。

「明日あすよ、ではさようなら」である。

保吉は憂鬱まぎを紛まぎらせるために巻煙草まきたばこを一本啣くわえようとした。

が、手をやったポケットの中には生憎あいにく一本も残っていない。彼

はいよいよ悪意のある運命の微笑びしょうを感じながら、待合室の外に

足を止とめた物売りの前へ歩み寄った。緑いろの鳥打帽とりうちぼうをかぶつ

た、薄い痘痕あぶたのある物売りはいつもただつまらなそうに、頸くびへ吊つ

つた箱の中の新聞だのキヤラメルだのを眺めている。これは一いっ

介いの商人ではない。我々の生命そがいを阻害そがいする否定的精神の象しょう徴ちゆう

である。保吉はこの物売りの態度に、今日も——と言うよりも
むしろ今日はじつとしてはいられぬ苛立たしさを感じた。

「朝日あさひをくれ給え。」

「朝日？」

物売りは不相あいかわらず変目を伏せたまま、非難するように問い返した。

「新聞ですか？ 煙草たばこですか？」

保吉は眉間みけんの震ふるえるのを感じた。

「ビール！」

物売りはさすがに驚いたように保吉の顔へ目を注そそいだ。

「朝日ビールはありません。」

保吉は溜りゅう飲いんを下げながら、物売りを後うしろに歩き出した。し

かしそこへ買いに来た朝日は、——朝日などはもう吸わずとも好い。忌いまましい物売りを一蹴いっしゅうしたのはハヴァナを吸ったのよりも愉快である。彼はズボンのポケットの底の六十何銭かも忘れたまま、プラットフォオムの先へ歩いて行つた。ちようどワグラムの一戦に大勝を博したナポレオンのように。……

岩とも泥とも見当けんとうのつかぬ、灰色をなすつた断崖だんがいは高だかと曇天に聳そびえている。そのまた断崖のてっぺんは草とも木とも見

当のつかぬ、白茶しらちやけた緑を煙らせている。保吉はこの断崖の下をぼんやり一人ひとり歩いて行つた。三十分汽車に揺ゆられた後のち、さらにまた三十分足らず砂埃すなほこりの道を歩かせられるのは勿論永久の苦痛である。苦痛？——いや、苦痛ではない。惰力だりよくの法則はいつのまにか苦痛という意識さえ奪つてしまつた。彼は毎日無感激にこの退屈そのものに似た断崖の下を歩いている。地獄の業苦ごうくを受くることは必ずしも我々の悲劇ではない。我々の悲劇は地獄の業苦を業苦と感ぜずにいることである。彼はこう云う悲劇の外へ一週に一度おとずつ躍り出していた。が、ズボンのポケットの底に六十何銭しか残つていない今は、……

「お早う。」

突然声をかけたのは首席教官の栗野あわのさんである。栗野さんは五十を越しているであろう。色の黒い、近きん眼鏡がんきようをかけた、幾いくぶ分か猫背ねこぜの紳士しんしである。由来ゆらい保吉の勤めている海軍の学校の教官は時代を超越した紺サアジこん以外に、いかなる背広をも着たことはない。栗野さんもやはり紺サアジの背広に新らしい麦藁帽むぎわらぼうをかぶっている。保吉は丁寧にお時儀じぎをした。

「お早うございます。」

「大分蒸だいぶんむすようになりましたね。」

「お嬢さんはいかがですか？ 御病気のように聞きましたが、：

…」

「難ありがと有う。やつと昨日退院きのうしました。」

粟野さんの前に出た保吉は別人のように慇懃である。これは少しも虚礼ではない。彼は粟野さんの語学的天才に頗る敬意を抱いている。行年六十の粟野さんは羅甸語のシイザアを教えていた。今も勿論英吉利語を始め、いろいろの近代語に通じている。保吉はいつか粟野さんの Asino —— ではなかつたかも知れない、が、とにかくそんな名前の伊太利語の本を読んでいるのに少からず驚嘆した。しかし敬意を抱いているのは語学的天才のためばかりではない。粟野さんはいかにも長者らしい寛厚の風を具えている。保吉は英吉利語の教科書の中に難解の個所を発見すると、必ず粟野さんに教わりに出かけた。難解の、——もつとも時間を節約するために、時には辞書を引いて見ずに教わりに出

かけたこともない訣わけではない。が、こう云う場合には栗野さんに対する礼儀上、当惑とうわくの風を装よそうことに全力を尽したのも事実である。栗野さんはいつも易やすやすと彼の疑問を解決した。しかし余むぞうさり無造作に解決出来る場合だけは、——保吉は未だいまにはつきりとひとしあんよそおひとしあんよそお

一 思案を装よそおった栗野さんの偽善ぎぜん的態度を覚えている。栗野さんは保吉の教科書を前に、火の消えたパイプを啣くわえたまま、いつもちよつと沈吟ちんぎんした。それからあたかも卒そつぜん然と天上の黙示もくじでも下くだったように、「これはこうでしょう」と呼びかけながら、一気にその個所を解決した。保吉はこの芝居のために、——この語学的天才よりもむしろ偽善者たる教えぶりのために、どのくらい栗野さんを尊敬したであろう。……

「あしたはもう日曜ですね。この頃もやっぱり日曜にや必ず東京へお出かけですか？」

「ええ、——いいえ、明日は行かないことにしました。」

「どうして？」

「実はその——貧乏なんです。」

「常談じょうだんでしょう。」

栗野さんはかすかに笑い声を洩もらした。やや鳶色とびいろの口髭くちひげのかげにやっと犬齒けんしの見えるくらい、遠慮深そうに笑ったのである。君は何しろ月給のほかに原稿料もはいるんだから、莫大ばくだいの収入を占めているんでしよう。」

「常談でしょう」と言ったのは今度は相手の保吉である。それも

粟野さんの言葉よりは遙かに真剣に言つたつもりだった。

「月給は御承知の通り六十円ですが、原稿料は一枚九十銭なんです。仮に一月に五十枚書いても、僅かに五九四十五円ですね。

そこへ小雑誌の原稿料は六十銭を上下しているんですから：

…」

保吉はたちまち熱心にいかに売文に糊口することの困難である

かを弁じ出した。弁じ出したばかりではない。彼の生来の詩的

情熱は見る見るまたそれを誇張し出した。日本の戯曲家や小説

家は、——殊に彼の友だちは惨憺たる窮乏に安んじなけれ

ばならぬ。長谷正雄は酒の代りに電気ブランを飲んでゐる。大

友雄吉も妻子と一しよに三畳の二階を借りてゐる。松本法

城ようも——松本法城は結婚以来少らくし楽らくに暮くらしているかも知れな
い。しかしついこの間まではやはり焼鳥屋へ出しゅつ入にゅうしていた。

……

「Appearances are deceitful ですかね。」

栗野さんは常談とも真面目まじめともつかずに、こう煮にえ切きらない相あ
槌いづちを打うった。

道の両りょう側がわはいつのまにか、ごみごみした町家ちやうかに変わっ
ている。塵埃ちりぼこりにまみれた飾り窓かざと広告の剥はげた電柱と、——市と
云う名前はついていても、都会らしい色彩はどこにも見えない。
殊ことに大きいギヤントリイ・クレエンの瓦屋根の空に横よこわつていた
り、そのまた空に黒い煙や白い蒸気せんりの立たつていたりするのは戦

つ^{あたい}に^{すさま}憚^{あたい}に^{すさま}憚^{あたい}する^{すさま}凄^{あたい}じ^{すさま}さ^{すさま}である。保吉は^{むぎ}麦^{むぎ}藁^{むぎ}帽^{むぎ}の^{むぎ}庇^{むぎ}の^{むぎ}下^{むぎ}に^{むぎ}こ^{むぎ}う^{むぎ}云^{むぎ}う^{むぎ}景^{むぎ}色^{むぎ}を^{むぎ}眺^{むぎ}め^{むぎ}な^{むぎ}が^{むぎ}ら^{むぎ}、^{むぎ}彼^{むぎ}自^{むぎ}身^{むぎ}意^{むぎ}識^{むぎ}し^{むぎ}て^{むぎ}誇^{むぎ}張^{むぎ}し^{むぎ}た^{むぎ}売^{むぎ}文^{むぎ}の^{むぎ}悲^{むぎ}劇^{むぎ}に^{むぎ}感^{むぎ}激^{むぎ}し^{むぎ}た。同時^{むぎ}に^{むぎ}平^{むぎ}生^{むぎ}尊^{むぎ}重^{むぎ}す^{むぎ}る^{むぎ}瘦^{むぎ}せ^{むぎ}我^{むぎ}慢^{むぎ}も^{むぎ}何^{むぎ}も^{むぎ}忘^{むぎ}れ^{むぎ}た^{むぎ}よ^{むぎ}う^{むぎ}に^{むぎ}、^{むぎ}今^{むぎ}も^{むぎ}片^{むぎ}手^{むぎ}を^{むぎ}突^{むぎ}こ^{むぎ}ん^{むぎ}で^{むぎ}い^{むぎ}た^{むぎ}ズ^{むぎ}ボ^{むぎ}ン^{むぎ}の^{むぎ}中^{むぎ}味^{むぎ}を^{むぎ}吹^{むぎ}聴^{むぎ}し^{むぎ}た。

「^{むぎ}実^{むぎ}は^{むぎ}東^{むぎ}京^{むぎ}へ^{むぎ}行^{むぎ}き^{むぎ}た^{むぎ}い^{むぎ}ん^{むぎ}で^{むぎ}す^{むぎ}が^{むぎ}六^{むぎ}十^{むぎ}何^{むぎ}銭^{むぎ}し^{むぎ}か^{むぎ}な^{むぎ}い^{むぎ}始^{むぎ}末^{むぎ}な^{むぎ}ん^{むぎ}で^{むぎ}す。」

保吉は^{むぎ}教^{むぎ}官^{むぎ}室^{むぎ}の^{むぎ}机^{むぎ}の^{むぎ}前^{むぎ}に^{むぎ}教^{むぎ}科^{むぎ}書^{むぎ}の^{むぎ}下^{むぎ}調^{むぎ}べ^{むぎ}に^{むぎ}と^{むぎ}り^{むぎ}か^{むぎ}か^{むぎ}つ^{むぎ}た。が、^{むぎ}ジ^{むぎ}ャ^{むぎ}ツ^{むぎ}ト^{むぎ}ラ^{むぎ}ン^{むぎ}ド^{むぎ}の^{むぎ}海^{むぎ}戦^{むぎ}記^{むぎ}事^{むぎ}な^{むぎ}ど^{むぎ}は^{むぎ}ふ^{むぎ}だ^{むぎ}ん^{むぎ}で^{むぎ}も^{むぎ}愉^{むぎ}快^{むぎ}に^{むぎ}読^{むぎ}め^{むぎ}る^{むぎ}も^{むぎ}の^{むぎ}で

はない。殊きように今日は東京へ行きたさに業ごうを煮にやしている時である。彼は英語の海語辞典かいごじてんを片手に一頁ぺいばかり目を通した後のち、憂鬱うちにまたポケットの底の六十何銭かを考えはじめた。……

十一時半の教官室はひっそりと人音ひとおとを絶やしている。十人ばかりの教官も栗野さん一人を残したまま、ことごとく授業に出て行ってしまった。栗野さんは彼の机の向うに、——と云つても二人の机を隔へだてた、殺風景さつぷうけいな書棚しよだなの向うに全然姿を隠している。しかし薄うす蒼あおいパイプの煙は栗野さんの存在を証明するように、白壁しろかべを背にした空間の中へ時々かすかに立ち昇のぼっている。窓の外の風景もやはり静かさには変りはない。曇どん天てんにこそつた若葉うすひかの梢こずえ、その向うに続いた鼠色の校舎、そのまた向うに薄光うすひかつた

入江、——何もかもどこか汗ばんだ、もの憂い静かさに沈んでい
る。

保吉は巻煙草を思い出した。が、たちまち物売りに竹篋返し
を食わせた後、^{のち}すっかり巻煙草を買うことを忘れていたのを発見
した。巻煙草も吸われないのは悲惨である。悲惨？——あるいは
悲惨ではないかも知れない。衣食の計に追われている窮民の
苦痛に比べれば、六十何銭かを歎ずるのは勿論贅沢の沙汰であ
ろう。けれども苦痛そのものは窮民も彼も同じことである。いや、
むしろ窮民よりも鋭い神経を持っている彼は一層の苦痛をなめ
なければならぬ。窮民は、——必ずしも窮民と言わずとも好い。
語学的天才たる粟野さんはゴツホの向日葵にも、ウォルフのリー

ドにも、乃至ないしはヴェルアアランの都会の詩にも頗すこぶる冷淡に出来上つてゐる。こう云う粟野さんに芸術のないのは犬に草のないのも同然であろう。しかし保吉に芸術のないのは驢馬ろばに草のないのも同然である。六十何銭かは堀川保吉に精神的饑渴きかつの苦痛を与えた。けれども粟野廉太郎れんたろうには何の痛痒つうようをも与えないであろう。

「堀川君。」

パイプを啣くわえた粟野さんはいつのまにか保吉の目の前へ来ている。来ているのは格別不思議ではない。が、禿はげ上あがつた額ひたいにも、近きん眼鏡がんきようを透すかした目にも、短かに刈り込んだ口髭くちひげにも、――多少の誇張を敢てすれば、脂やに光びかりに光つたパイプにも、ほとんど女人にょにんの嬌きよう羞ゆうに近い間まの悪さの見えるのは不思議である。

保吉は呆氣にとられたなり、しばらくは「御用ですか？」とも何とも言わずに、この処子の態を帯びた老教官の顔を見守っていた。「堀川君、これは少しですが、……」

栗野さんはてれ隠しに微笑しながら、四つ折に折った十円札を出した。

「これはほんの少しですが、東京行の汽車賃に使って下さい。」

保吉は大いに狼狽した。ロックフェアラに金を借りることは一、再ならず空想している。しかし栗野さんに金を借りることはまだ夢にも見た覚えはない。のみならず咄嗟に思い出したのは今朝滔々と栗野さんに売文の悲劇を弁じたことである。彼はまっ赤になったまま、しどろもどろに言い訣をした。

「いや、実は小遣こづかいは、——小遣こづかいはないのに違ちがいないんですが、——東京へ行けばどうかかりますし、——第一もう東京へは行ゆかないことにしているんですから。……」

「まあ、取ってお置きなさい。これでも無いよりはましですから。」

「実際必要はないんです。難ありがと有あうございますが、……」

栗野さんはちよつと当惑とうわくそうに啣くはえていたパイプを離しながら、四つ折の十円札へ目を落した。が、たちまち目を挙げると、もう一度金縁きんぶちの近眼鏡の奥に嬌羞けうしゆうに近い微笑を示した。

「そうですか？　じゃまた、——御勉強中失礼でした。」

栗野さんはどちらかと言えば借金を断ことわられた人のように、十円

札をポケットへ収めるが早いか、そこそこ辞書じしょや参考書の並んだ書棚しよだなの向うへ退却した。あとにはまた力のない、どこかかすかに汗ばんだ沈黙ばかり残っている。保吉はニツケルの時計を出し、そのニツケルの蓋ふたの上に映うつつた彼自身の顔へ目を注そそいだ。いつもへいじょうしん平常心を失つたなと思うと、厭いやでも鏡中の彼自身を見るのは十年來の彼の習慣である。もつともニツケルの時計の蓋ふたは正確に顔を映すはずはない。小さい円の中の彼の顔は全体すこぶに頗る朦朧もうろうとした上、鼻ばかり非常にひろがっている。幸いにそれでも彼の心は次第に落着きを取り戻しはじめた。同時にまた次第に栗野さんの好意を無むにした気の毒さを感じはじめた。栗野さんは十円札を返されるよりも、むしろ欣然きんぜんと受け取られることを満足に思

つたのに違いない。それを突き返したのは失礼である。のみならず、——

保吉はこの「のみならず」の前につむじ風に面するたじろぎを感じた。のみならず窮状を訴えた後、のち恩恵を断るのは卑怯ひきょうである。義理人情は蹂躪じゅうりんしても好い。卑怯者になるだけは避けなければならぬ。しかし金を借りることは、——少くとも金を借りたが最後、二十八日の月給日まで返されないことは確かである。彼は原稿料の前ぜんしやく借などはいくらたまって平気だった。けれども栗野さんに借りた金を二週間以上返さずにいるのは乞食こじきになるよりも不愉快である。……

十分ばかり遡しゅんじゅん巡しゅんじゅんした後、彼は時計をポケットへ収め、ほと

んど喧嘩^{けんか}を吹っかけるように昂然^{こうぜん}と栗野さんの机の側へ行つた。栗野さんは今日^{きょう}も煙草の缶、灰皿、出席簿、万年糊^{まんねんのおり}などの整然と並んだ机の前に、パイプの煙を靡^{なび}かせたまま、悠悠とモリス・ルブランの探偵小説を読み耽^{ふけ}っている。が、保吉の来たのを見ると、教科書の質問とでも思ったのか、探偵小説をとぎした後、静かに彼の顔へ目を擡^{もた}げた。

「栗野さん。さっきのお金を拝借させて下さい。どうもいろいろ考えて見ると、拝借した方が好^いいようですから。」

保吉は一息にこう言った。栗野さんは何とも返事をせず立ち上つたように覚えている。しかしどう云う顔をしたか、それは目にもはいらなかつたらしい。爾来^{じらい}七八年を閲^{けみ}した今日^{こんにち}、保吉の僅

かに覚えているのは大きい粟野さんの右の手の彼の目の前へ出たことだけである。あるいはその手の指の先に（ニコティンは太い第二指の爪を何と云う黄色きいろに染めていたであろう！）四よつ折おりに折られた十円札が一枚、それ自身嬌きょうしゅう羞ゆうを帯びたように怯おず怯おず差し出されていただけである。……………

保吉は明後日あさっての月曜日に必ずこの十円札を粟野さんに返そうと決心した。もう一度念のために繰り返せば、正まっにこの一枚の十円

札である。と言うのは他意のある訣わけではない。前借の見込みも全然絶え、父母兄弟とも喧嘩をした今、たとえ東京へ出かけたにもせよ、金の出来ないことは明らかである。すると十円を返すためにはこの十円札を保存しなければならぬ。この十円札を保存するためには、——保吉は薄暗い二等客車の隅に発車の笛を待ちながら、今朝けさよりも一層いっそう痛切に六十何銭かのばらせん銭ましに交まじった一枚の十円札を考えつづけた。

今朝よりも一層痛切に、——しかし今朝よりも憂鬱にはない。今朝はただ金のないことを不愉快に思うばかりだった。けれども今はそのほかにもこの一枚の十円札を返さなければならぬと云う道徳的興奮を感じている。道徳的？——保吉は思わず顔をしかめ

た。いや、断じて道徳的ではない。彼はただ栗野さんの前に彼自身いげんの威厳を保ちたいのである。もつとも威厳を保つ所以ゆえんには借りた金を返すよりほかに存在しないと云う訣わけではない。もし栗野さんも芸術を、——少くとも文芸を愛したとすれば、作家堀川保吉は一篇の傑作あたらを著わすことに威厳を保とうと試みたであろう。もしまた栗野さんも我々のように一介いつかいの語学者にほかならなかつたとすれば、教師堀川保吉は語学的素養を示すことに威厳を保つことも出来たはずである。が、芸術に興味のない、語学的天才たる栗野さんの前にはどちらも通用するはずはない。すると保吉いげんは厭いやでもお応でも社会人たる威厳を保たなければならぬ。即ち借りた金を返さなければならぬ。こう云う手数てすうをかけてまでも、無理に威

嚴を保とうとするのはあるいは滑稽こっけいに聞えるかも知れない。しかし彼はどう云う訣わけか、誰よりも特に粟野さんの前に、——あの金縁きんぶちの近眼鏡をかけた、幾分いくぶんか猫背ねこせの老紳士の前に彼自身の威嚴を保ちたいのである。……

その内に汽車は動き出した。いつか曇どん天てんを崩くずした雨はかすかに青んだ海の上に何隻も軍艦を煙らせている。保吉は何かほつとしながら、二三人しか乗客のいないのを幸い、長ながとクツションの上に仰向けあおむになつた。するとたちまち思い出したのは本郷ほんごうのある雑誌社である。この雑誌社は一ひと月つきばかり前に寄稿を依頼する長手紙をよこした。しかしこの雑誌社から発行する雑誌に憎ぞ悪うおと侮蔑ぶべつとを感じていた彼は未だにその依頼に取り合わずにいる。

ああ云う雑誌社に作品を売るのは娘をばいしやうふ売笑婦にするのと選ぶ所はない。けれども今になつて見ると、多少のぜんしやく前借の出来そうなのはわずかにこの雑誌社一軒である。もし多少の前借でも出来れば、――

彼はトンネルからトンネルへはいる車中の明暗を見上げたなり、いかに多少の前借のきやうらく享樂を与えるかを想像した。あらゆる芸術家の享樂は自己発展の機会である。自己発展の機会をとら捉えることは人じんてん天に恥ずる振ふるまい舞ではない。これは二時三十分には東京へはいる急行車である。多少の前借を得るためにはこのまま東京まで乗り越せばい好い。五十円の、――少くとも三十円の金さえあれば、久しぶりに長谷や大友と晩飯を共にも出来るはずである。

フロイライン・メルレンドルフの音楽会へも行かれるはずである。カンヴァスや画の具も買われるはずである。いや、それどころではない。たった一枚の十円札を必死に保存せずとも好いはずである。が、万一前借の出来なかつた時には、——その時はその時と思わなければならぬ。元来彼は何のために一粟野廉太郎の前に威厳を保ちたいと思うのであろう？ 粟野さんはなるほど君子人かも知れない。けれども保吉の内生命には、——彼の芸術的情熱には畢に路傍の行人である。その路傍の行人のために自己発展の機会を失うのは、——畜生、この論理は危険である！

保吉は突然身震いみふるをしながら、クツションの上に身を起した。今もまたトンネルを通り抜けた汽車は苦しそうに煙を吹きかけ吹

きかけ、あめまし雨交りの風にそよ戦ぎ渡ったあおすすき青芒のやまかい山峽を走つてい
る。……

よくじつ翌日の日曜日の日暮れである。保吉は下宿のふるとういす古籐椅子の上に
悠々と巻煙草へ火を移した。彼の心は近頃でない満足じょうあふの情に溢れ
ている。溢れているのは偶然ではない。第一に彼は十円札を保存
することに成功した。第二にある出版書肆しよしは今しがた受取った手
紙の中に一冊五十銭の彼の著書の五百部の印税を封入してよこし

た。第三に——最も意外だったのはこの事件である。第三に下宿は晩飯の膳ぜんに塩焼あゆの鮎いっぴきを一尾つけた！

初夏の夕明ゆうあかりは軒先に垂たれた葉桜の枝ただよに漂たっている。点々と

桜の実をこぼした庭の砂地にも漂たっている。保吉のセルの膝ひざの上に載のった一枚の十円札にも漂たっている。彼はその夕明りの中にし

みじみこの折目のついた十円札へ目を落した。鼠色の唐艸からくさや十

六菊ぎくの中に朱の印を押した十円札は不思議にも美しい紙幣である。

楕円形だえんけいの中の肖像も愚鈍ぐどんの相そうは帯びているにもせよ、ふだん思

っていたほど俗悪ではない。裏も、——品ひんの好いい緑に茶を配した

裏は表よりも一層見事である。これほど手垢てあかさえつかずにいたら

ば、このまま額縁がくぶちの中へ入れても——いや、手垢てあかばかりではな

い。何か大きい器の上に細かいインクの楽書らくがきもある。彼は静かに十円札を取り上げ、口の中にその文字を読み下した。

「ヤスケニシヨウカ」

保吉は十円札を膝の上へ返した。それから庭先の夕明りの中へ長ながと巻煙草の煙を出した。この一枚の十円札もこう云う楽書の作者にはただ酔すしにでもするかどうかを迷わせただけに過ぎなかったであろう。が、広い世の中にはこの一枚の十円札のために悲劇の起つたこともあるかも知れない。現に彼も昨日きのうの午後はこの一枚の十円札の上に彼の魂たましいを賭かけていたのである。しかしもうそれはどうでも好いい。彼はとにかく栗野さんの前に彼自身の威嚴まじかを全まうした。五百部の印税も月給日までの小遣こづかいに当てるのには

十分である。

「ヤスケニシヨウカ」

保吉はこう眩つぶやいたまま、もう一度しみじみ十円札を眺めた。ち

ようど昨日踏破きのうとうはしたアルプスを見返えるナポレオンのように。

(大正十三年八月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十円札

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>